

で、日蓮宗宗制の中に教区規程の運用について明記されているが、ほとんど活用されていないのが現状である。

すでに北海道・山梨・三重・近畿の教区単位で教化センターの活動が始まっているという報告があつたが、教研の行事程度にしか教区の活動がなされていない。何故、教区規程が設けられたかという、その目的は地域の布教・教育のためにある。この規程の見直しをして運営を盛り上げることによつて、教化活動の交流と組織の確立が発展的に進んでいくと確信する。

第四に、各寺院の教化活動の実態と交流については、報告にあつた妙恩寺さんのように素晴らしい寺院もあるが、全寺院の六十パーセントが二十八等級以下の寺では、なかなか思うように活動が行われていないと思う。過去十五回の教研とちがい、開宗七百五十年に向つて地道に心のふれ合いをもつて前進するために、建前の議論でなく、本音の討議ができることを心から願う。

第五に、教化センターづくりということで方向をとりつけていただき、以上、問題提起としたい。

分散会報告（要旨）

第一分散会

第一分散会は、座長伊丹栄彰師のもと二十一名の参加を得て開かれ、四テーマの各発題を受けて討議がなされた。その概要は次の通りである。

「信徒教化の推進をめざして」は、教化活動の実際は教師の求法、弘法の姿勢が大切であることが話された。口先きの説教より一緒に信行することが大事で、教師の日常生活の立居振舞いこそに教化があり、そこに檀信徒の共感を呼ぶといえる。教師の行住坐臥の姿こそ教化活動の基本である。教化がない場合は、宗義から離れ離壇化を起こす状況となる。

教化の手段には、経本をかいししての繋がりが大事である。一緒に読ますために問いかける工夫、経文の説明・解説の方法が考えられるべきである。また檀信徒との密接な関わりは、コミュニケーションが重要で、行事案内

状も決まり文句でなく、目を引きつける工夫が必要で、かつ続けることが肝要である。さらに寺報作成・運営等に檀信徒を参加させ、布教の手伝いをさせることがよき協力者を生む。また檀信徒に檀家の前で話をさせたり、信行の姿を檀信徒に紹介すること、檀家を表に出し体験発表等の活躍の場を与えることは、意義がある。それは他の人を引っばる核となる人物となつてゆくので、育成に力をそそぐべきである。

「社会教化の充実をめざして」では、地域住民の参加による寺での餅つき会で合掌させている、水団会を開いて唱題させることにより地域との繋びつきが生まれた、保育所の宗教教育が住民に喜ばれている、子供会に一定のカリキュラムを作成し寺を解放して地域社会との繋がりを深めていること等、様々な活動が報告された。その地域活動は地域社会の協力が大切で、活動するチャンスを作ること、なぜ活動するのかの理由、地域社会にだけこめる環境づくりが大事である。また宗教者は何の活動をしているか注目されているので、宗教者が一般地域社会に参加し活動する姿を見せることは、教化につながる

ので大事である。社会福祉活動も、専門的役職仕事に積極的に入り、教化の繋がりを起こしてゆくべきであり、また社会教導師の育成活性化が急務であろう。しかし行政上の福祉の役割に教師が何が入るべきではなく、本当に人を教化することは何か、を考えることを踏まえなければいけない。平和運動については、社会には信仰運動、檀信徒には平和運動と一体化をめざして理解させ参加させるべきである。お題目を社会にひろめるにあたり、現在の状況においては、地域社会にて自分自身が素通りしてはいけないのであつて、できることからすることが大事である。

「法器養成と人材活用をめざして」は、現状の姿と問題点を話しあつた。法器養成に関しては、研修道場にて若手僧侶に布教させている、県内もちまわりの信行会を若手僧侶に取り仕切らせ法話等をさせている、布教師会に若手を入会させ説教の場へ出させる、若手を専任布教師に選ぶ、年一度の研修道場を開いて研修させる、年配者と若手を組んで各寺へ布教に派遣させる等、若手養成の研修方法が報告された。また既成の法要回向文・引導

文を使わず、オリジナルを試みて手本とさせる等、師の態度こそが教育の元として師敵が話された。そのなかで問題となったのは以下の通りである。信行道場入場者の資格と期間の再検討が必要で、またその後の教育機関が必要と思われる。弟子養成も親子間の師弟では、僧風教育がむずかしいので師弟の血縁関係のあり方を考えるべきであろう。また僧侶の立居振舞いが粗雑の感があるので、僧風教育の再検討も必要である。そして宗門は給仕第一・師敵道尊といわれているが、何に對して給仕第一なのか、どういう師が師といえるのか究き詰めた上で、養成が基本的に考えられるべきであろう。そして制度的に非住職の活用化を考えて宗門の活性化をめざすべきである。

「教化活動の交流と組織の確立をめざして」では、機構を通じての教化が話された。特派布教の反省から、布教化活動の交流のために旅費の実費補助の予算化をし、遠近を問わずに交流できるよう機構の充実化が求められた。さらに寺単位の諸行事衰退状況のなかでの組寺単位の活動の有効性と交流が話された。また教師間の交流の

ためにも教化センター作りが大事であって、教師全体が一体となってセンターの設置実動が急務であろうと話しあわれた。その今後の課題として、きめ細かい活動のために管区でつくり、教区へと発展させるべきとの意見と中央の充実化を求め、地方は連絡機構の役割のみでいいとの意見が出され、教化センターのあり方が熱い期待をもって考えられた。

(片野博義)

第二分散会

第一テーマ 信徒教化の推進をめざして

この問題では、各教師が自己の特質を活かして、比較的簡単にできることからはじめて、それを反復し長く続けることでよい結果を得たという報告が多かった。

実例としては、長年毎朝、定時に太鼓をたたくことで、近隣住民の目覚し代りになるなど、生活のリズムを作るのとあてにされ、休むと病気で、と見舞にくるほどになって、寺と住職の存在感を養い、寺檀の交流に役立って

るといふ例や、法要・通夜・葬儀などに、短くても数多くの機会を捉えて説法をする。教箋を縁ある人全員に配布する等、小さくとも多くの積み重ねが、徐々に効果を現わしてきている例、「万遍唱題修行」と称して、檀信徒が朝晩寺と家で何百遍か唱題をし、一万遍になると、寺が認定証を発行し、十万遍では、珠数・経本等、百万遍になったら逆修法号を授与するという、子供も老人も染しみ、励みの中で信行を重ねているという例もあった。

また、寺は自分達檀徒のもの、僧侶は仏事をさせるために養っている、という意識のところに住職して以来、むずかしい用語を一切使わず、善悪の話だけをして、善悪を教えてくれるのは住職であるという認識をやつと持たせ、今後は檀徒から信徒に、信徒から三宝護持の眞の檀徒へ、また、檀家の寺から寺の檀家へと導くように努力しているという例も聞かれた。特殊な例では、檀徒が少なく、周囲が他宗徒ばかりという寺では、法華経の代りに『父母恩重経』を使って布教し、改宗はしないが行事には参加するようになったという報告もあった。

このように寺に参詣するようになった檀信徒を子供

会・青年会・婦人会等でまとめたり、信行会等で教化する話や、集会を地域の実勢に合わせて土・日曜にするという話が出たが、信行会の結成・運営法、新興宗教に対する折伏法等について、教師間の情報交流の場をより多く設けたり、手引書等の発行の要望があった。

さらに、すでにある講中等を活かし、右の新組織も含めた行的団体を取りまとめ、中央でわかりやすい基本的な事柄からはじめる統一布教の理念及び文書を作り、格差をなくした、全国日蓮宗信行会といった全国的組織化も提案された。また、檀信徒を教育し布教師として、近隣社会の口コミ布教等に当らせ、将来は宗徒総弘通から四海帰妙を目指す提案もあった。

第二テーマ 社会教化の充実をめざして

地域教化においては、様々な形で地域にとけ込み、常説法教化の「聴く耳」を育てる努力の報告・提案が出された。

前項の朝晩の太鼓・梵鐘の他、寒行、門付けによる教箋配りといった方法の他に、民生委員・保護司・学校教師・町会・PTA・ボイスカウト・保育園等で地域社

会に奉仕し、長年にわたる実績により、住民・行政等から存在を認められ、寺が各種の相談所となり、信徒も増加したという報告があり、これらの資格・職種を持つ教師間で相談指導しあえる会を作りたいという提案があった。

広域社会教化のためにはTV・ラジオ等での伝道教化をという提案があった。

そして、社会教化は、社会に適合した、また住職の特性に合った多角的教化のために、各教師が努力工夫することと、世の悩みを知り独自性と適応性を持つ教師養成へと話は進んだ。

第三テーマ 法器養成と人材活用をめざして

世襲制で大学を出て信行道場で三十五日の研修を経れば、お上人で通用する現状により、求道弘通の宗門僧侶としての自覚を欠き、技術的にも劣る上に、利に聡い僧侶が増加していると歎く意見が多く出たが、世襲傾向の弊害は多いものの、世襲でなく、前住職遷化後に引継ぎを欠いて他地から住職し、一から始めて檀信徒を把握するまでに長年月を費やす状態も能率的ではないという点もあるのです。法器養成においては、世襲の弊害を無くす

方向で討議がなされた。

個々の師僧が育成する場合でも、互いに預け合って他人の釜の飯を体験させる方がよいという意見や、吸収のよい幼児期に宗門・管区等で沙弥校を開く。信行道場を僧侶になるための仕上げの場とするために、それ以前の研修、ある程度厳しい入行審査、出行後の青壮年研修・生涯研修、それに俗家発心者の教育等の制度を設ける提案が出された。

また、幼児教育のためも含めて、寺院婦人教育及び指導書作り、横の連絡のための組織作り等が討議された。

結論的に、自覚・技術を持ち、独自性・適応性のある、加えて、子弟教育のできる僧侶の養成制度を、速かに実現すべく今後も検討することとなった。

第四テーマ 教化活動の交流と組織の確立をめざして

各テーマにわたり指導手引書や情報交換が提案され、中央及び地方の教化資料センターに期待する声が多かったが、三重教化資料センターの体験として、実動する者が、何人かいつでも集まって事に当れるという条件が満たされることが必要という報告があり、上からの推進・

助成の他に、地域僧侶の研鑽会等から昇格するのも実際的な方法であり、上下両面から推めてゆくのがよく、教師交流の方法とあわせて検討してゆくことになった。

この他、特派布教師の人選・定員・任期・助成金等の問題で指摘があり、管区・教区主催の特派布教、護法大会実施に当たり、講師団名簿記載以外の有能講師を招く場合にも助成金を出してほしいという要望が出た。

また、同和問題を社会教化問題として取り入れて積極的に研究、対応してゆこうという提案が出、前記特派布教の問題と共に要望事項とすることとなった。

以上、「危機を危機として感じない所に危機あり」という言葉をふまえ、検討を検討、要望を要望だけに終らせない、他人まかせでない各自の努力が必要という確認をして終了した。

要望事項

- 信行会組織作りの手引書を作成してほしい。
- 同和問題のテキスト（教本）を作ってほしい。
- 第15回中央教研の要望事項にもあったが、「管区・もし

くは教区主催の特派布教並びに護法大会の実施にあたり、護法講師団名簿記載者以外の有能講師を招いて開催する場合にも、助成するように要望する。」

○ 布教年次計画の概要（石川試案）の中の第二期に、教化センターの管区内設置を目指すという項目を入れてほしい。

（常岡裕道）

第三分散会

第三分散会は、三十名が出席し、四テーマに添って二日間にわたる熱心な討議が展開された。以下各テーマに従い、討議の要旨を報告する。

① 信徒教化の推進をめざして

第一日目に、まず第一テーマの発題者である鎌田行学師より発題の補足説明がなされ、師の組織的かつ独特な信徒教化の諸活動が次々と報告された。次に、それを受けて、信徒教化の方法やあり方について、出席者各自の立場から発言が寄せられた。それらをまとめてみると、

(一) 信徒教化に対する、修法師としての取り組み姿勢について。

(二) 唱題行こそ、信徒教化の中心である。

(三) 言説布教にしても、生きた体験を話すべきであり、人に話せる様な体験を積極的に積む様、教師も努力すべきである。

(四) 毎月太鼓を叩いて街を回っているが、そうした地道な実践の積み重ねが、人の心を動かすものである。

等であった。こうした発言を通して、教化の方法には、言説布教・修法・唱題行・カウンセリング・人生相談等いろいろあるのが、結局は自分自身が、信仰の有難さと喜びとを感じるとする教師の姿勢が大切であり、その上で教化の場を通して信徒との心の触れ合いをもつことが肝心である、という結論に達した。すなわち重要なことは、教化する教師側の信仰心とその心構えであり、そうした教師の姿に、信徒達は感動してついてくると言うことがいえる。

さらに、様々な教化の方法をより具体化、充実化させるためにも、今後の教化学の促進を望む声があった。

② 社会教化の充実をめざして

ここでは、まず揭示伝道について話し合わせ、地域社会への教化という点から、その効果と積極的な活用が叫ばれ、さらに境内地だけでなく、地域社会の中にも掲示板を設置して、社会教化の充実を図ろうという提案も出された。

次に、公共役職に関する具体的な事例がいくつか報告されたが、本宗では、他教団に比べて保護司や民生委員を始め、公共役職につく者が少ないという現状を顧みて、本宗教師がそうした役職に対してもっと積極的に取り組み、あらゆる社会的な役割をかってでも、社会の中へ飛び込んで教化の実を挙げていくべきであるという、教師側の姿勢が問われた。

③ 法器養成と人材活用をめざして

本テーマに関しては、近頃教誌「群生」を始め宗門内外の新聞・雑誌等で触れられていることもあって、熱っぽい議論が交わされた。

まず法器養成という点からは、立正大学と信行道場の問題が数多く出され、その中で立正大学については、もっ

と信仰に根ざした宗学の教育をして欲しいという要望が強かった。

信行道場については、特に実施期間と内容の面で幾多の前向きな発言が交わされたが、結局、期間は変えずに内容の充実を図るべきであるという意見と、期間を延長した上で一層の充実を図るべきであるという意見の両者に集約され、今後さらに検討すべき余地が残された。

しかし法器養成の根本は実に師匠や親にあるのであって、師匠たる親がわが子に対し、小さな子供の時から徹底した子弟教育を施すことが求められ、そうした教師側の姿勢を認識した上で、沙弥校や信行道場・大学等の制度の確立を目指すべきであるという意見は、大方の納得するところであった。

次に、人材の活用については、久住謙是現宗研調査主認の基調報告における代務寺・無任寺の存在に関連して、宗門の援助を仰いで団地の傍に土地を求め、代務寺・無任寺を移して布教研修所の研修生等の巡遣を考えたらどうか、という具体的な提案も出されたが、広く人材の登用に關して、宗門の中にその場を作ることが当面の課題

とされた。

④ 教化活動の交流と組織の確立をめざして

ここでは、宗門のあらゆる組織の充実を図り、それを活かしていくという方向が望まれた。例えば、第三テーマとも関連するが、いわば組織で作り上げたともいえる布教研修生等に対しては、もっと活躍する役職と場を与えることが望ましい、との意見が多かった。

また、個人的、地域的、時間的な相違から、教師によっては、資料の不足等、教化に困難も生じるので、教化センターを設けて掲示板伝道の標語を始め、様々な資料を提供して欲しいとの切実な要望も出され、今後各地における教化センターの設立と、教化の一層の促進が期待された。

一方、中央教研と平行して地方教研をさらに充実させ、各地における教化の交流を図り、様々な問題に対応するよう、われわれ教師一人一人が努力していこうという方向が確認され、こうして二日間にわたる討議は終了した。なお、討議の中で今回の中央教研における分散会という会議形式と、四テーマの組み方に関して、会議運営上

の問題として、二、三の質問と、卒直な意見が出されたが、それらは今後の中央教研の開催とその充実を図る上で、参考にすべき苦言であったことを付言しておく。

(古河良皓)

第四分散会

信徒教化の推進をめざして

教師個人の教化による布教活動の発表は、すでにほとんど出尽くしているのではないかと考えられるので、一歩踏み出す意味をこめ、「組織的活動」についての発表・報告となった。婦人会・青年会など数多くある中で、寺院全般に関連する護持会は、それ自体が活動できる態勢にしなければならないとの認識から、その活動を中心とする次のような発表があった。

①他護持会との合同研修 (一)他寺院の護持会と合同しての統一信行。これは各地で行われているようだが、修了回数に応じて信徒袈裟に付ける記章を与え、励みと自覚を与えて成功している例があった。(二)会の中心である

護持会長を集めての統一信行。徹底化が図られている。

②護持会内に信行部・編集部・霊跡団参旅行部の三部門を設け、自主的運営をさせての活動。

③その他として、維持会・後援会という名称での組織化。本堂建立など将来の基金づくりのための、会員による植林作業。また護持会ではなく、青壮年会活動として自主的な寒修行、霊跡団参、寺への一日奉仕(山内整備)などが報告された。

この中で問題点が二点みられた。①檀信徒の自主的運営という点では、励みとなって成功する場合と、檀権が強くなってくる場合とがあるので、やはり放任ではなく「指導」するこの基本理念を持つべきである。②護持会は従来、金銭面の援助ということが多くいわれ、教化面が忘れられがちである。山川智応が述べているような「受持、念持、護持、弘持」を教学的裏付けとして護持の語は出てはいるはずであり、教化と経済面が「車の両輪のごとく」備わる性格になるよう、護持会規定の提唱を宗門に要望していこうと確認された。

社会教化の充実をめざして

寺院の解放と、公職に就任しての社会教化が主に話合われた。初めの寺院解放は以下の通りであった。

①寺院側が主催する場合 (一)子供会を開催し、その親たちに企画・立案・世話役などの幹事をさせると共に、カリキュラム中の仏教精神や祖伝などで父母をも教化していく。(二)万灯供養会という形で、立正平和を地域社会に訴える。

②寺を会場に提供する場合 学習塾とか、書道に貸す等である。これも地域住民との交流を図るためには、有効と考えられるが、この時も教化という点を念頭に置いた貸し方をすべきであり、例えば、貸す時の前提条件として十分ぐらいの法話をするなどの姿勢を取っていくべきではないか。教箋を貼って寺の雰囲気を感じさせることもできる。なお、寺院は閉鎖的で入りにくい面があるので、教師が先ず社会に出て行き、交流する内に寺へ入ってこられるような態勢を取るべきである、との考えも出された。

次いで民生委員・保護司などの公職に就任しての教化という面では、宗派色を出すことは余りできないが、法

華経や御書の一節を引用するなど、本宗教師としての意識で行っているとの苦勞談、また、在家の役職者たちがつて、法衣を着用しての行ないが一つの信頼感を与え、急に法味言上するような機会に感激を与えたこともあると披露された。法衣着用はPTAや婦人会の講演などでも効果的な場合があり、公職における布教に際し、服装の面でも心掛けが必要であると話し合われた。

最後に身近な地域社会だけにとどまらず、世界の平和、日本の平和という点を考慮して広く社会の動向に目を向けながら、地道な活動をしていこう、とまとめられた。

法器養成と人材活用をめざして 基調報告を受けて、先ず過疎・過密の問題が論議された。無住寺院の統廃合、また三多摩のような人口増加地への新寺建立などを宗門が指導するべきであると同時に、夕張から札幌に移動したという過疎地寺院が、自力で過密地に移り成功した実例として紹介され、宗門はそのような体験例を資料提供して欲しいと要望されていた。次いで、次のことが論じられた。

①法器養成——後継者を育てるには、(一)幼児期から「お

前は後継ぎだ」と洗脳するのが効果的で、そのためには
寺院婦人の力が大切。(二)これとは对象的に、幼児期から
自主的に出家する気持ちになるような、家庭の雰囲気
を作るほうがよい。この二つの意見が出た。但し両者共に、
幼児教育のガイドブック作成と、寺院婦人の組織化促進
について宗門・現宗研へ要望があった。

②人材活用——信行道場に関しての意見交換があり、
高齢で有力な主任は顔見知りの道場生が多く、手加減を
する傾向があるので、布教研修所出身の若い人を任命し
てはどうか。関連して、カリキュラムの充実、入行時に
読経などの資格審査を厳密にすべきではないか、と述べ
られた。

③後継問題——紹介、斡旋する窓口や、人材銀行を宗
門に設立する提案があった。

教化活動の交流と組織の確立をめざして

初めに宗務所内に宗務担当と、護法担当両事務長が設
立されているが、役割が不明確なので、宗門による行政
指導の必要性が述べられ、その後、意見交換に入って以
下のようにまとめられた。①教化センターづくりへ向け

て、教師間の交流が進まないのは、寺院の格差、人材の
アンバランスに原因がある。②教研開催の一方法として
参加者を都市部・山村部など環境別に区分してはどうか。
③現宗研出版物は全寺院に配布されるよう努力し、教研
不参加の人材を発掘すべきである。

要望事項

護持会の在り方は、教化と財政面とが、車の両輪のご
とくである。宗門からの指導は財政面に重点が置かれ
ているように思われるが、教化面を強力に打ち出すよ
うに指導して欲しい。

(山口裕光)

第五分散会

第一日目の分散会では、「信徒教化の推進をめざして」
というテーマに沿って、まず分散会参加者全員から教化
活動の事例とその問題点を発表してもらった。発言の中
で多かったのは、教化する側(教師)の問題点と教化の方

法である。基調報告に見られるように過疎化現象等によって無住寺院・宗教的な活動寺院の増加が深刻な問題となっている一方、信徒教化に精進すべき立場にある教師の無自覚・消極的な姿勢に対して、反省と自誠を含めた批判の声も依然として絶えない。たとえば教師が自己の力を過信し教化の背のびをする、あるいは勉強不足であつたり教化の結論を急ぎ過ぎる、そのため信頼を失つてしまふ、こうした事例は数知れなく存在する。まず教師自身がおのれの力量をよく知り、充分な学習や研鑽を積むなど努力を重ね、教化の計画・実行の上で時間を充分にとり、手塩にかけて育てていくような姿勢をもつことが大切である。また日頃より寺院を社会に開放しておくとともに、教師も地域社会の一員として広く交流の場を求める姿勢をもつことも大切である。教化の方法は、地域・環境に応じて決定されるべきであるが、まず押しつけではなく誰にでもわかりやすい布教をすることが基本的態度である。現代社会は価値観も多様化しているので、お題目の信仰を最終目的とした上で様々な教化の契機が考えられ、特に何か一つの特色を打ち出した布

教方法（たとえば武道や芸術など）をとるのも良い。また教化された者は自ら教化する者となり、次第に教化の輪を広げていく拡充の布教をめざす組織性をもつことが望ましい。教化する者とされる者との年代差・価値観の相違から生じる困難な問題も、こうした組織性をもつことによつて解消されていくのではないか。

第二日目は、参加者から中央教研の位置づけについての疑問に端を発して、その在り方に対する不信などが表明された。中央教研と地方教研との関係について、成果を反映させるのか、あるいは問題を持ち込むのかなどによつても、両者の開催時期の前後についての意見が分かれ、また中央委嘱の役員と地方選出の役員の相違から生じる不備も指摘された。いずれにしても地方教研をさらに充実していくことを望む声が多かつた。なお、この問題は分散会座長の預かりとし今後現宗研嘱託会議にて検討するものとした。

次に、「社会教化の充実をめざして」のテーマのもとでは、まず社会教化活動のとらえ方、特に新設された社会教導師の意義が不明確であるとの発言があつた。これに

ついでに、宗門が社会教化という枠組みを拡大したものと理解して、今後はすべての教師が社会教化の任に当たるべきことを再認識し、社会教化活動に積極的に取り組むべき自覚と姿勢をもって具体的に行動することが必要である。また社会教導師は、こうした観点から選任されるべきである。社会教化活動の具体的な内容や運営方法は、各管区ごとに独自性をもって検討されるべきで、これに関しては兵庫西部における事例（全寺院の檀信徒中で輸血用血液を便宜し合う体制づくり・耳で聞く本・老人ホームでの追善法要など）が報告された。また助言者からは、全寺院に相談所を開設している旨を示す看板設置の提案があった。次に、「教化活動の交流と組織の確立をめざして」のテーマでは、文書布教の在り方をめぐって、寺報の発行等で情報の交換が必要であること、近くに教化センターが設立され利用可能となるまでの間は、各管区および中央に発行されている寺報等の総目録を備えて欲しいこと、あるいはこうした情報を日蓮宗新聞紙上などで知らせる方法もあること、などが話し合われた。

最後に、「法器養成と人材活用をめざして」では、はじ

めに地方寺院における住職後継者問題の事例が話され、ついで『群生』第六号掲載の子弟教育への提言をめぐり活発な論議を展開した。信行道場の充実、専修林のような現任教育の場の設置、および生涯教育を理想とする養成機関の体系化などについては、おおむね強い賛意の発言が寄せられた。しかしその一方、義務化を強め過ぎる場合はその弊害も大きいこと、また研修機関ばかりを整えるのではなく、養成した教師を実際に有効に生かす方法・活躍させる場も同時に確立するべきであること、などにも留意して欲しいという発言は傾聴に値する。法器養成で大切なことは、養成機関の門戸はできる限り広く開放し、その内容において厳しくしていくことであらう。こうした体系的な養成教育が実施されれば、一方で問題となっている過疎地等の後継者不足も、質の高い求道的な教師の増加から解決へ向かう期待も生じるのではないだろうか。

（大島啓植）

第六分散会

第六分散会は、三十名の参加者による自由討議から始め、四テーマの順序にとられずに第一日目の討議を終え、運営側で発言内容を整理し、次のように四テーマ別のまとめをした。

第一テーマ（信徒教化）

①今日の寺院問題には、経済面のほかに檀権の問題が大きく関係している。②檀家を信徒化し、積極的信仰を促進させる必要がある。③信徒教化の技術だけが前面に出、信仰による救済の面がおざなりにされている。④霊園使用による檀家問題が生じている。

第二テーマ（社会教化）

①青少年問題・老人問題への具体的取組みが必要である。②電話によるカウンセリングを実施しているが、とても有効である。③登校拒否児を取り扱うことが多い。④家庭問題・社会問題への対応が立ち遅れている。二番せんじは効果がうすい。

第三テーマ（法器養成）

①きびしいと後継ぎはできない。形より中味を重視すべきである。②俗人とちがう

ところが必要であるから、形も大切である。③いまの若者は、強制（たてまえ）を受け入れない。本音をいうほうがついてくる。④法器養成を念頭において、まず自身の子弟をしつけるべきである。

第四テーマ（組織確立）

①宗門が団地に布教拠点をつくり、過疎地寺院住職や非住職教師に布教の場を与える。②宗門が縦割機構にあるために横の交流がなく、活性化していない。③無住寺や後継者難寺院に青年教師を派遣する「インターン制度」を考えてほしい。④管区全教師が会費を出して社教会活動を支援するなど、組織活性化の具体例がある。

このまとめをもとに、第二日目はテーマ別に順を追って討議を行った。活発な討議の具体的内容は、次の通りである。

第一テーマ（信徒教化）

説教のたねを仏教のみに限るとあきらまれるので、一般的内容に結びつけることが大切である。マンネリやむずかしいのもだめである。組寺で立正信行会をつくり、各寺から檀信徒をよせて成功している例がある。寺院婦人の役割が大きいので、資質を

高める指導をもとに布教分担の位置づけをしてほしい。

第二テーマ（社会教化） 核・被爆者などの社会問題は、教師たるものの根幹にかかわる問題である。反面、宗内での靖国問題についての討論つみあげが不足している、実態とかけ離れている。こちらから地域社会に入っていくことが必要である。心理学などを宗学の基礎として学ぶことが、現実社会への対応のために大切である。非行は徹底的に自由な発言をさせ、心を浄化させることが必要である。これはカウンセラーの用いる「心の浄化作用」理論で、大変有効である。教師の資質が問題である。

第三テーマ（法器養成） やる気のある人材の発掘と活性化の方策を考えたい。宗門が管理する公正な（寺株）制度を公認して、身分保証・住職交替問題を解決してほしい。秘密保持を前提に、「空き寺情報」を出してほしい。干与人制度・法縁制度の見直しを考えたい。現実の宗門子弟を見ると、自覚のなさなど暗然たる思いがする。住職・非住職を問わず、「再教育」が必要である。近所の寺どうしの仲は、日蓮宗が一番悪い。これでは、異体同心どころか交流などできない。教師の道義・ルールの確

立を切望する。

第四テーマ（組織確立） 寺中心の現体制を教師中心にしてほしい。山梨教研センターは発足して二年目、布教・寺院経営・後継者養成の三部門にわけて研究・交流を行っている。三重教化センターは三年目、宗務所機構と重複しない組織づくりを工夫し、独立した建物を事務所に持つて、地道な出版・教化活動を行っている。東京西部センターは五年目、やや開店休業のきらいがあるが、出版活動に大きな力を入れて活動を行っている。

分散会型式という初めての試みに時間不足が加わって、討議内容の深まりはあと一步の観があったが、具体的な発言が多く、特に法器養成については、現在の教師の資質を問い直す点が多く指摘され、「異体同心」の宗是が実現されるために、教師間の道義とルールの確立が熱心に話された。

四つのテーマに指針を与えて解決するための交流の場として、教区・管区の「教化センター」が具体的に必要であることが、第六分散会討議の一応の結論となったことと思われる。

（伊藤立教）